

学位論文要旨

中国人日本語学習者の「誘い」に関する語用論的研究
一言語使用と産出過程に注目して

広島大学大学院教育学研究科
教育学習科学専攻 日本語教育学分野

D176264 李晨昕

I. 論文題目

中国人日本語学習者の「誘い」に関する語用論的研究—言語使用と産出過程に注目して—

II. 論文構成（目次）

第1章 序論

1.1 本研究の背景と目的

1.2 本研究の構成

第2章 先行研究

2.1 学習者の発話行為の産出に関する研究の概観

2.2 日中の誘いに関する先行研究

2.2.1 日本語母語話者の誘いに関する先行研究

2.2.2 日中の誘いに関する先行研究

2.2.3 日本語学習者の誘いに関する研究

2.3 学習者の発話行為の産出過程の認知活動に関する研究

2.4 先行研究のまとめと本研究の課題

第3章 「誘い」における談話展開の特徴

3.1 分析の観点

3.2 予備調査

3.2.1 目的

3.2.2 調査対象者

3.2.3 場面設定

3.2.4 質問紙

3.2.5 手続き

3.2.6 分析方法

3.2.7 結果

3.3 本調査概要

3.3.1 調査対象者

3.3.2 材料

3.3.3 手続き

3.3.4 データ

3.3.4.1 データの文字化

3.3.4.2 研究対象データ

3.4 分析

3.4.1 分析の枠組み

3.4.2 分析方法

3.5 結果

3.5.1 先行部の特徴

3.5.2 主要部の特徴

3.5.3 終結部の特徴

3.6 結果のまとめと考察

第4章 誘い行為におけるストラテジーの使用の特徴

4.1 分析の観点

4.2 データ

4.3 分析

4.3.1 分析の枠組み

4.3.2 分析方法

4.4 結果

4.4.1 「誘い」の話段におけるストラテジーの使用

4.4.1.1 「誘い」の話段の切り出しについて

4.4.1.2 「誘い」の話段におけるストラテジーの使用について

4.4.2 「再誘い」の話段におけるストラテジーの使用

4.4.2.1 負担度の高い会話における「再誘い」の話段の切り出しについて

4.4.2.2 負担度の高い会話における「再誘い」の話段のストラテジーについて

4.4.2.3 負担度の低い会話における日本語学習者の「再誘い」の話段の特徴

4.5 結果のまとめと考察

第5章 誘い表現の使用の特徴

5.1 分析の観点

5.2 データ

5.3 分析

5.3.1 分析の枠組み

5.3.2 分析方法

5.4 結果

5.4.1 誘い表現における文型

5.4.2 誘い表現における語彙的特徴

5.5 結果のまとめと考察

第6章 学習者の「誘い」遂行の認知過程

6.1 分析の観点

6.2 調査概要

6.2.1 調査対象者

6.2.2 データ収集方法

6.2.3 手続き

6.2.4 データ

6.3 分析方法

6.4 結果

6.4.1 「誘い」遂行前と遂行中の認知活動

6.4.1.1 「文法や語彙への意識」

6.4.1.2 「友人関係への意識」

6.4.1.3 「発話の計画」

6.4.1.4 「相手の反応への予測」

6.4.2 学習者の語用論的知識

6.4.2.1 「情報提供」の話段における学習者の語用論的意識

6.4.2.2 「共同行為要求」ストラテジーの使用に対する語用論的意識

6.5 結果のまとめと考察

第7章 結論

7.1 本研究のまとめ

7.2 総合考察

7.2.1 日本語学習者の「誘い」の談話展開の特徴

7.2.2 日本語学習者の誘い行為におけるストラテジーの使用と誘い表現の特徴

7.3 教育的示唆

7.4 今後の課題

参考文献

III. 論文要旨

第1章 序論

1.1 本研究の背景と目的

「誘い」とは、話し手が両者にとって利益になる行為に聞き手も参加するように働きかける発話、またその誘いが成立するために様々な情報のやり取りを行う過程までを含む行為である（黄，2011；鄭，2007）。誘いの遂行は良好な人間関係の維持に役立つため、学習者にとって重要である。学習者による誘い遂行の特徴を把握するためには、誘い表現の使用とともに話者間のやりとりなど、誘いが行われる過程を含めて分析する必要がある。そして、得られた結果をもとに、目標言語母語話者との共通点や相違点を探り、目標言語母語話者との相違が生じる場合、何に起因するものなのか検討する必要がある。そこで、本研究では日本語学習者の「誘い」の遂行における言語使用の特徴について、日本語母語話者や中国語母語話者と比較しながら検討する。また、日本語母語話者と言語使用が異なる原因を探る。

1.2 本論文の構成

全7章で構成されている。第1章では、問題の所在と本研究の目的を述べ、第2章では、先行研究の概観と研究課題の提示を行う。第3章では「誘い」の談話構成、第4章ではストラテジーの使用、第5章では、誘い表現の特徴から、学習者の「誘い」の遂行実態を調査する。第6章では、学習者の「誘い」遂行に影響を与える要因を検討する。第7章では、各章の研究結果を総合的に分析し、考察する。その上で、教育的示唆及び今後の課題を述べる。

第2章 先行研究

2.1 学習者の発話行為の産出に関する研究の概観

発話行為の構成は複雑であり、その産出には様々な要因が関わっている。学習者の発話行為の産出に関する先行研究は、発話意図を伝達する際に用いられるストラテジーに着目した研究と、意図の伝達効力を調整する方法に着目した研究の大きく2つに分けられる。ストラテジーを扱った研究は多様な発話行為を用いていたものが多い。一方、調整方法を扱った研究は、依頼行為以外の研究が少ない。調整方法の使用は発話行為の種類によって異なる可能性があるため、多様な発話行為を研究した上で調整の効果を探る必要がある。

2.2 日中の誘いに関する先行研究

日本語の「誘い」には以下のような特徴がある。まず、誘い談話には基本構造として「勧誘の話段」と「勧誘応答の話段」のほか、「先行発話の話段」、「相談の話段」、「代案の話段」など様々な話段が含まれる（ザトラウスキー，1993）。また、日本語母語話者は、誘う際に

「気配り発話」というストラテジーを多用することが指摘されている（ザトラウスキー，1993；鄭，2009）。さらに日本語母語話者は「誘いの当然性」や「動作主体の人称」，「聞き手の意向」によって表現形式を使い分けていることも明らかになった（川口・蒲谷・坂本，2002；姫野，1998）。

日中の「誘い」に関する対照研究からは以下のようなことが明らかになっている。まず談話構造に関しては，日本語では先行話段を多用するのに対して，中国語では先行部の使用が少ない（黄，2014；劉，2015）。また，誘いの主要部では，日本語は「情報補充の話段」が多いのに対し，「再誘いの話段」が少ない（黄，2014；2016）。次に，ストラテジーの使用に関しては，主要部で「共同行為要求」と「誘導発話」が多く用いられるものの，日中間ではその使用傾向が異なる（黄，2011；2012）。そして，誘いの負担度によっても終結部のストラテジーが異なる（黄，2015）。

日本語学習者の「誘い」に関して，中国人日本語学習者は，日本語母語話者が多く用いる「～しないか」を使用できず，「～しようか」を多用する傾向にある（孫，2009）。また，学習者は「ひまがあるか」のような誘い先行語句を多用する傾向にあるが，聞き手への配慮を表す「言いさし」の使用は少ない（長谷川，2002）。さらに日本語母語話者は相手の意向を尋ねる誘い表現を多用するのに対し，学習者は自分の意向を直接述べる表現を多用することがわかっている。

2.3 学習者の発話行為の産出過程の認知活動に関する研究

近年，学習者と目標言語母語話者の発話行為の遂行に相違が生じる原因を論じる際に，学習者が発話行為の遂行過程で行う認知活動を検討する研究が増えてきた（Cohen & Olshtain, 1993；Félix-Brasdefer, 2008）。その結果，学習者が発話行為遂行中に，「留意した情報」，「発話の計画設計」，「語用論的知識の使用」など，様々な点を意識することが明らかにされている。また，学習者がうまく表現できない時には伝達内容の簡潔化，語彙の言い返し，言語的回避など多様なストラテジーを使用することもわかっている（Cohen & Olshtain, 1993）。さらに，学習者が母語と目標言語の語用論的規範の相違に気づいても，言語能力の制約によって，産出時に困難を感じる人が多いと報告されている（Félix-Brasdefer, 2008）。

2.4 先行研究のまとめと本研究の課題

まず，誘いの談話構造については，誘い談話全体に注目した研究は少ない。また，先行研究は，日本語母語話者のみを対象としているため，学習者の誘いの談話構造の特徴は不明である。次に，ストラテジーの使用については，先行研究では日中の「再誘い」で用いられるストラテジーを分析しているが，「誘い」の話段におけるストラテジーの使用に注目する研究は少ない。また，負担度がストラテジーの使用に与える影響についてもいまだ不明である。さらに，「再誘い」の話段における誘いの表現の使用には注目されておらず，誘い表現の特徴を検討するためには，表現形式のほか，語彙的調整の使用にも注目する必要がある。最後に，

学習者が発話行為を遂行する中で多様な認知活動を伴うことがわかっている。発話行為の遂行は要因によって異なるため、要因別に認知過程を検討する必要がある。また、日本語学習者の「誘い」行為を扱った研究のうち、遂行の認知過程に焦点を当てた研究は少ない。

本研究では、中国人日本語学習者の「誘い」の遂行における言語使用の特徴及び言語使用が日本語母語話者と異なる原因を明らかにするために、以下の課題を設定する

課題 1：日本語学習者の誘いの談話展開には、負担度別でどのような特徴が見られるか。

また日本語母語話者や中国語母語話者とどのような相違点と共通点が見られるか。

課題 2：日本語学習者の誘い談話におけるストラテジーの使用には、負担度別でどのような特徴が見られるか。日本語母語話者や中国語母語話者とどのような相違点と共通点が見られるか。

課題 3：日本語学習者の誘い表現の使用には、負担度別でどのような特徴が見られるか。

日本語母語話者や中国語母語話者とどのような相違点と共通点が見られるか。

課題 4：学習者の誘いの遂行が日本語母語話者と異なる原因は何か。

第3章 「誘い」における談話展開の特徴

3.1 分析の観点

負担度別の「誘い」談話における、先行部、主要部、終結部の特徴を探る。

3.2 予備調査

誘い内容と負担度を要因に場面を設定し、日中両言語母語話者にそれぞれの場面に対する負担度を判断させた。日中の判断傾向が類似した場面から、負担度別に 2 場面を抽出した。

3.3 本調査概要

日本語母語話者同士、中国語母語話者同士、そして、中国人上級日本語学習者と日本語母語話者同士にロールプレイをさせた。

3.4 分析

収集した会話を先行部、主要部、終結部に分け、「話段」によって分類した。まず、3 グループで先行話段が出現したかどうかの割合を比べた。また、負担度別に先行部、主要部、終結部、それぞれで各話段の平均数も比較した。主要部については、負担度別にすぐに承諾された会話、そうでない会話の割合に加え、「再誘い」の話段の出現回数についても比較した。

3.5 結果

先行部では、学習者の先行話段の使用は日本語母語話者より少なく、中国語母語話者に類似していた。また、日本語母語話者も学習者も「条件確認」を多用していたが、学習者は負担度によって出現頻度が異なっていた。主要部では、負担度の低い場合で、学習者の一回での誘いの成功率は低かった。終結部では、学習者は負担度の高い会話では「意思確認」を、

低い会話では、両言語母語話者場面で殆ど見られなかった「情報提供」を多用していた。

3.6 結果のまとめと考察

学習者が日本語母語話者と比べて先行話段を使用しないのは、上級になっても母語である中国語に影響されているためだと考えられる。また、「条件確認」の使用について、日本語母語話者では負担度による使用回数の差が見られないのに対し、学習者は負担度高の会話の使用数が低い傾向にあった。このことから、学習者の「条件確認」の使用基準が日本語母語話者と異なると推測できる。さらに、負担度の低い場合でも、学習者の一回での誘いの成功率は低いことがわかった。これは、学習者が先行部の使用が少ないことと、終結部における「情報提供」の使用が多いことが影響していると考えられる。

第4章 誘い行為におけるストラテジーの使用の特徴

4.1 分析の観点

負担度別に切り出しのストラテジーの使用と各ストラテジーの使用について分析する。

4.2 データ

第3章で抽出した「誘い」と「再誘い」の話段を分析対象とした。

4.3 分析

「誘い」の話段及び「再誘い」の話段において、負担度別に、切り出しで使用した各ストラテジーの割合と各ストラテジーの平均使用頻度を話者グループ間で比較した。

4.4 結果

切り出しについては、「誘い」の話段では、日本語母語話者は負担度に関わらず「情報提供」の使用が多かった。一方、学習者は中国語母語話者と同様、負担度の高い会話では「情報提供」、低い会話では「共同行為要求」を用いていた。「再誘い」の話段では、学習者も日本語母語話者も、「誘導発話」を用いて切り出していたが、学習者の使用割合は低かった。

ストラテジーの選択傾向については、「誘い」の話段において、負担度の高い会話では、日本語母語話者、中国語母語話者とも、多様なストラテジーを駆使するのに対し、学習者は「情報提供」と「共同行為要求」に依存していた。一方、負担度が低い会話では、学習者は多様なストラテジーを用いていた。「再誘い」の話段において、日本語母語話者、学習者ともに「誘導発話」を多用していたが、学習者の使用頻度は低かった。そのほか、日本語母語話者は「負担の軽減」や「共同行為要求」を、学習者は「情報提供」や「気配りの発話」を多用していた。

4.5 結果のまとめと考察

日本語母語話者は負担度に関わらず、「情報提供」を用いて誘いを切り出す傾向があるのに対して、学習者は中国語母語話者と同様の傾向が見られた。このことから、上級学習者でも、

母語の規範を援用して誘い行為に応じていた可能性がある。また学習者は、負担度の高い場合にストラテジーを使用する頻度や種類が少ないものの、「再誘い」の話段では多様なストラテジーを駆使する傾向が見られた。このことから、学習者は言語知識があっても適切な段階で使用するのが難しいことは窺える。最後に、学習者は日中の母語話者がよく用いていた「共同行為要求」をあまり使用しないことがわかった。これは、学習者が相手の領域に踏みこまず、間接的に誘うことで相手への配慮を示す手段として用いている可能性を示唆している。

第5章 誘い表現の使用の特徴

5.1 分析の観点

負担度別に、「共同行為要求」の表現形式と語彙的調整の特徴を分析した。

5.2 データ

第3章で収集したデータを用いた。第4章で抽出した「共同行為要求」を分析対象とした。

5.3 分析

負担度別に「共同行為要求」の各表現形式の割合と「共同行為要求」で使用された各種類の語彙的調整の平均使用頻度を比較した。

5.4 結果

表現形式の選択については、日本語母語話者は、「誘い」の話段では「相手の意向を直接尋ねる型」と「自分の意志を述べる型」を、「再誘い」の話段では「自分の意志を述べる型」を多用していた。学習者は、「誘い」の話段では「自分の意向を述べる型」の使用割合が高かったが、概ね日本語母語話者に似た傾向であった。「再誘い」の話段では、中国語母語話者が多用する「自分の意向を述べる型」を最も多く用いていた。語彙的調整について、日本語母語話者は、負担度に関わらず「語調を弱める表現」、「控え表現」、「主観化表現」の使用が多かった。一方、学習者は、日本語母語話者に比べ、全体的に使用頻度は低かった。負担度の高い会話で「控え表現」、「語調を弱める表現」、「主観化表現」をよく使用していたが、低い会話では「語調を弱める表現」と「控え表現」以外の使用が少なかった。

5.5 結果のまとめと考察

学習者の表現形式の特徴として、「相手の意向を直接尋ねる型」が多用されていたが、日本語母語話者ほど使用率は多くなかった。これは、中国語の言語知識と中国語での友人関係の捉え方が影響したと考えられる。語彙的調整については、学習者は全体的あまり使わない傾向が見られたが、内的調整で「ちょっと」のみが負担度に関わらず多く観察されていた。このことから、上級学習者であっても、多様な内的調整を使いこなすことが難しいと考えられる。

第6章 学習者の「誘い」遂行の認知過程

6.1 分析の観点

学習者の「誘い」遂行中の認知活動と語用論的知識の使用について検討した。

6.2 調査概要

学習者と日本語母語話者のペア(15組)にロールプレイをさせた後、録音を聞かせながら、ロールプレイをする前としていた時に考えたことを発話させた。

6.3 分析方法

学習者の回答から、意味のある発言のまとまりやキーワードを抽出し、重複した回答をまとめ、抽出した内容を意味に基づきまとめ、要約できるグループに分類し、質的に分析した。

6.4 結果

学習者の「誘い」遂行において、「文法や語彙への意識」「友人関係への意識」「発話の計画」「相手の反応への予測」「言語能力の不足に対する意識」「母語話者の助けへの意識」「間違っ
た内容への意識」という7種類の認知活動が観察された。その中でも、「友人関係への意識」、
「発話の計画」、「相手の反応への予測」の他に、「中国語の社会語用論的知識の使用」「日本語の言語知識の不適切な使用」「日本語の語用言語学的知識の欠如」「教科書の影響」なども発話遂行に少なからず影響していたことが示唆された。

6.5 結果のまとめと考察

学習者の「誘い」遂行中の認知活動を分析した結果、友人関係への意識について言及している回数が多かった。回答の中には、友人関係であれば丁寧語を用いないということに関する言及がみられたが、丁寧体を使用する学習者も多く、必ずしも意識することで適切な産出につながるとは限らないことが分かった。また、語用論的知識に関する回答から、友人であれば直接誘いに入るといった回答が見られた。このように母語の規範を援用することで、日本語母語話者に唐突な印象を与えてしまうことにつながる可能性がある。最後に、学習者の言語知識に関しては、「文法や語彙に対する意識」や「言語能力の不足に対する意識」の回答から学習者は多様な表現を未だ使いこなせないと感じている者がいることがわかった。

第7章 結論

7.1 本研究のまとめ

まず、談話構造について、学習者の展開パターンは日本語母語話者と異なっていた。具体的には、学習者の先行話段の使用は少ないこと、負担度が低い場合でも「再誘い」話段が多いこと、そして終結部では「情報提供」話段の使用が多いことがわかった。次に、ストラテジーの使用について学習者は「共同行為要求」や「情報提供」などの誘いストラテジーを使

えても、日本語母語話者に比べて使用頻度が少なく、使用する箇所も異なっているだけでなく、誘いの表現形式の選択が日本語母語話者と異なる傾向にあることがわかった。最後に発話遂行にあたって、学習者は「友人関係への意識」、「発話の計画」、「相手の反応への予測」「中国語の社会語用論的知識の使用」「日本語の言語知識の不適切な使用」「日本語の語用言語学的知識の欠如」「教科書の影響」などを意識していたことが分かった。

7.2 総合考察

日本語学習者の「誘い」の談話展開の特徴についての考察である。まず先行話段の使用有無について、学習者は日本語母語話者より先行話段を使用しない傾向が多く見られた。このことから、学習者は上級になっても母語である中国語に影響されていると考えられる。次に先行部の話段の選択については、学習者特有の選択傾向が見られた。これは、学習者の先行話段の選択基準や使用目的が両言語母語話者と異なると推察できる。最後に、学習者は「再誘い」の話段を多用していた。これは、負担度の高い会話では学習者は積極的な働きかけを回避すること、負担度の低い会話では先行部の使用が少ないこと、終結部における「情報提供」の話段の使用が多いことが影響した可能性がある。

日本語学習者の誘い行為におけるストラテジーの使用と誘い表現の特徴について、まず、学習者は「誘い」の段階で日本語母語話者や中国語母語話者と異なり、積極的に働きかけることを避け、言語的な行動を控える姿勢が見られた。これには、学習者の語用論的能力と相手の反応への予測が影響したと考えられる。また、学習者は負担度の低い場合、「誘い」の話段や「再誘い」の話段では多様なストラテジーを駆使するだけの言語知識は持っているものの、状況に応じて適切に使用できないことが分かった。最後に、学習者は「相手の意向を直接尋ねる型」の使用が少なく、中国語の言語知識と友人関係の捉え方に影響されていたと考えられる。

7.3 教育的示唆

「誘い」行為、特に負担度の高い会話の誘いについては、相手の都合を聞いたり、趣味を確認したりするような先行話段の使用の指導が必要である。次に、早い段階で相手に情報を伝えることで、スムーズに相手の承諾が得られる可能性が高まることを、教室内で指導する必要がある。最後に、誘い表現の文型を導入する際、負担度を調整した状況での「誘い」や、1回目の誘いであるかといった異なる段階での「誘い」を取り上げることで、それに見られる特徴を学習者に気付かせ、表現の使い分けを指導することも重要だと考える。

7.4 今後の課題

本研究では上級学習者のみを対象としていたため、習熟度による変化については解明していく必要がある。また、親疎・上下関係など要因を操作して誘い表現の使用を調査し、本研究で得られた結果と比較することも今後の課題である。最後に、今後は、母語話者にも誘い遂行中の認知過程についての調査を行い、学習者が母語基準の何をを用いて目標言語にその基

準を当てはめたのか，母語話者が何を意識して表現を選択したのかなど，産出中の認知活動を比較しながら検討することも有意義だと考える。